

横須賀における清水邸の二つの側面

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野口, 遂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/9968

横須賀における清水邸の二つの側面

野口 遂

- 1 はじめに
- 2 清水家の歴史と清水邸
 - 2.1 江戸時代元禄期
 - 2.2 清水邸の特徴
- 3 清水邸を管理する二つの団体
 - 3.1 遠州横須賀倶楽部
 - 3.2 掛川市観光協会大須賀支部
 - 3.3 二つの団体を通して見えること
 - 3.4 地元の人の意識とこれからの課題
- 4 考察
- 5 おわりに

1 はじめに

今回のフィールドワーク実習の調査地が静岡県掛川市の横須賀に決まったとき、神奈川県出身の私には神奈川県横須賀市のイメージしかなかった。それどころか、静岡県に横須賀という地域があったことすら知らなかった。横須賀とはどんな町なのかインターネットで調べたところ、清水邸というものが私の目に留まった。横須賀に関するいくつかの観光パンフレットなどを見ると、三熊野神社大祭には劣るものの清水邸に関してもいくつかパンフレットが存在していることがわかった。

このように外部に向けて PR されている清水邸であるが、横須賀を訪れた人たちは、清水邸は横須賀を象徴するもの、そのように捉えているのだろうか。また、地元の人にはどれほど根付いた存在であるのか。横須賀に住んでいる人と外から来た人たちで、清水邸がどのようにその目に写っているのか、そのことも同時に気になった。また、清水邸を調査しようとした動機はそれだけではない。私は昔から歴史的建造物にとっても興味があり、清水邸という一つの建物の歴史的背景を知りたいという気持ちもあった。それらを踏まえ、この報告書では清水邸とはどのような建物で、どのような歴史があり、どのような機能を有しているのか、清水邸はまちづくりに貢献しているのか、これらの項目について記述する。ここでの「まちづくり」とは福井英雄、高田昇より、その町の住民や行政も含めて地域ぐるみで行動し、歩み続けるということとする（福井・高田 1993）。横須賀という土地で清

水邸がどのような機能を有しているのかを明らかにするため、一週間の調査をした。

2 清水家の歴史と清水邸

清水邸庭園を調査するにあたって、その来歴の検討は不可欠となっている。この節では清水家の歴史における変遷と時代ごとの清水邸のあり方、清水邸の特徴について記述していきたい。

2.1 江戸時代元禄期

清水家の調査からわかった清水邸の歴史によると、清水邸の最古の歴史は江戸時代元禄期にまで遡る。江戸時代元禄期に江戸から来家多七という人が横須賀に来て廻船問屋を営み、横須賀湊を利用して商材をふるい、財を成したと伝えられている。そこでは物資から石材などに至るまでの様々なものを扱っていた。

清水家は元々伊勢国一身田（現在の三重県津市）の出身で、代々八十郎を襲名していたということが、当時の言い伝えなどからわかっている。清水家は海運業を生業としており、太平洋岸を北上して遠州横須賀にたどり着き、元禄期の頃より江戸の豪商である来家多七に番頭として仕え、御用商人、廻船問屋として発展し、藩内の荷物や年貢米の集約や運搬をしていたという。また、横須賀城主などからの信望も厚く、金などを貸したり普請事業に協力したりするなど惣庄屋も務め、横須賀の中心的存在であった。

前述のとおり、清水家は江戸元禄期に代々八十郎を名乗り、横須賀とともに繁栄していた。しかし、第 5 代目である清水八十郎氏の頃に明治維新が起きたことで自ら廻船問屋業を廃業し、清水家は新政府のもとで特定郵便局を営むことを請け負った。その後、廻船問屋であった建物を郵便局舎として活用した。この郵便局舎は 1951（昭和 26）年まで使用された。現在の郵便局は大須賀の町の南側へ移され、違う建物を利用して業務を行っている。清水邸が廻船問屋から郵便局舎へと変わり利用されていた名残として、清水家本宅上部の瓦には郵便マークが彫られており（写真 1）、本宅内には郵便局長室の部屋が残っている。



写真 1 清水邸本宅の玄関と屋根瓦の郵便局マーク（野口撮影）

2.2 清水邸の特徴

本項では清水邸の外見上、建築形式の特徴について記述する。

桑原武によると、清水邸は本宅が横須賀街道に面しており、南北に長い短冊形の敷地になっている。現在は、主屋と離れ、土蔵、長屋門などが歴史的建造物としての公開のために整備されている。その清水邸の南側には湧き水の豊かな回遊式の庭園が広がっている。清水邸の敷地の西側には、下紙川（げしかわ）が流れている。この川は横須賀の町を東西に流れていて、水路の遺構が残されていた。しかし、昭和期戦後に水路の改修を行い、現在は清水邸庭園に隣接している。清水邸の本宅は創建年代を確定することは難しい。土間の土台に一部、転用したと思われる資材が見受けられる。垂木の欠き跡があり檜材であることから、おそらく安政地震以降に建てられたと思われる。横須賀街道側には 1、2 階共に美しい格子がはまっている。その格子は関西の町家を思わせる趣がある（桑原 2015）。

3 清水邸を管理する二つの団体

前節では清水家の歴史と清水邸のあり方について記述した。この節では清水邸を管理している二つの団体の概要とこだわり、清水邸のどの部分をどのように利用しているのか。その中で見えてくる問題点について記述していきたい。

3.1 遠州横須賀倶楽部

遠州横須賀倶楽部は 1985（昭和 60）年頃に隣町に大型スーパーマーケットができるというのを聞き、大須賀の商業への危機を感じた当時の商工会の青年部のメンバー 20 人ほどが集まり発足した団体である。当時の商工会の上層部のメンバーたちは町の経済的な活性

化のため、隣町に対抗して大型のスーパーを建設しようと考えていた。その中で、商工会の青年部の有志達によって結成された遠州横須賀倶楽部は「ホンモノ志向で、歴史と文化のあふれる横須賀らしさを活かしたまちづくり」を望んでいた。こうした視点で遠州横須賀倶楽部は地域おこし活動を展開しているが、その中で見据えているものがある。遠州横須賀倶楽部の鈴木武史氏（男性、50代）によると、遠州横須賀倶楽部は不特定多数の人に横須賀を訪れてもらうのではなく、「横須賀の町に存在する、いいもの、いいところをまず横須賀の人びとに知ってもらい、自らの地元を誇りを持ってもらうこと」を大切にしている。また、地域の活性化自体はもとより、「何人来たかより、誰が来たか」、「固有名詞で呼び合える関係を築く」ということも目的としている。横須賀の町並みを利用し全国の芸術家たちの作品を展示する「ちっちゃな文化展」を催す、横須賀の伝統的行事である三熊野神社大祭などにも大きく関わるなど、その活躍の幅はとても広い。

そんな遠州横須賀倶楽部は清水家の子孫から清水邸本宅の管理を任されており、その保存と利用に努めている。遠州横須賀倶楽部は清水邸の本宅を地元向けに開放しており、前述の「横須賀の人にもっと横須賀を知ってもらう」という活動に利用している。しかし、全く清水邸庭園の管理に関わっていないわけではなく、地域の人びとで庭園に生えている木々の手入れをしたり、池の掃除をしたりすることもあるようだ。遠州横須賀倶楽部の竹内誠人氏（男性、60代）は、横須賀の歴史の中でとても大きな部分を占めている清水邸を、町の活性化をするという枠組みの中で、保存と活用を兼ねていきたい、利潤のための利用は好ましくない、と話していた。そのような枠組みの中での清水邸の用途は様々であるが、地元の人びとによると、お茶会や落語の公演に使用するため遠州横須賀倶楽部が場所を提供するなどの活動をしているという。実際清水邸本宅でのイベントはその過半数を遠州横須賀倶楽部が主催しているが、地元の人びとによる主催もあるようだ。このことについて鈴木氏は「遠州横須賀倶楽部と地元の人という二つの目線でイベントすることで新しいものが生まれる。清水邸をハブとして同じ方向を向いた人びとが集まり、地域への誇りが高まっていく。イベントはきっかけづくりであり、それにより清水邸と地元の人との繋がりができる」と語っていた。

3.2 掛川市観光協会大須賀支部

掛川市観光協会大須賀支部（以降、観光協会とする）は横須賀に拠点を置いて活動する団体である。観光協会、遠州横須賀倶楽部が発足する前から存在しており、その当時は利潤を得るための「観光」を打ち出していた。しかし、1992（平成4）年に愛知県で開催された「全国山車祭りフォーラム」に行った時、横須賀は他所と比べて祭りの宣伝のためのパンフレット等が充実していないことに気づいた。そこで当時の観光協会の人間が、発足したばかりの遠州横須賀倶楽部から何人かをピックアップし、観光協会に参加させることで、少しずつ今の形態に近づいていった。

観光協会は清水氏が市に寄付した清水邸庭園の管理を担当している。清水邸庭園の管理

は、樹木の管理や池の管理や事故等が起きた時の責任の所在の問題などにより、行政に管理を委託されている観光協会の方が都合が良いようだ。観光協会の杉山幸一氏（男性）は「清水邸庭園はあくまで掛川市のもので、県内外の人に楽しんでもらうことが大切」というていた。本宅が地元に向けられて利用されているのとは異なり、庭園は市が全国に観光地として発信しているので横須賀以外の地域の人もたくさん訪れる。それとは対照的に、地元の人は清水邸庭園に「敷居が高い」と感じる人が多いようで、地元に住んでいても中に入ったことがない人もいようだ。しかし、ここ 10 年来の遠州横須賀倶楽部と観光協会の管理により徐々に横須賀に浸透してきている。

昔は、遠州横須賀倶楽部は地元の人びとに向けた活動、いわゆる「内向け」、観光協会は観光としての活動、いわゆる「外向け」と違う方向を向いていたが、今は「外向けに発信することで、内部の人がその価値に気づく」、という異なるようで同じ方向を向いている。

3.3 二つの団体を通して見えること

本項では、二つの団体を通してどのようなことが見えるのか記述したい。清水邸は庭園と本宅で、外向けと内向けというふうに住み分けがしっかりできている。さらに遠州横須賀倶楽部は民間の管理、観光協会は行政の管理、というように二つの団体の間でも住み分けができている。民間の管理は自由がきいてフレキシブルであり、行政の管理はかっちりとしており企画力に長けている。どちらの団体もそれぞれの長所を生かし、清水邸を管理している。それに加え、観光協会の人の多くは遠州横須賀倶楽部の人間であるため、同じ方向を向いて活動することができる。また、前述のように本来外向けの施設である庭園の管理（庭園の木々の手入れ、池の掃除など）を内の存在である地元の人が行うなど、清水邸という一つの建造物の中で自らの土地と周りの人びととの信頼関係が成り立っていることがわかる。

3.4 地元の人の意識とこれからの課題

これまでは、清水邸が横須賀においてどのような存在であるのか、遠州横須賀倶楽部と観光協会が清水邸を地元の人びと、外部の人びとに向けてどのように資源化してきたのかについて記述してきた。この項では、実際横須賀の人びとはそれらの地元の人びとに向けた活動についてどのように認識しているのか、そしてこれからの課題について記述していく。

実際にした質問は以下の通りである。

- ・清水邸に行ったことがあるか。
- ・いつ行ったのか。
- ・清水邸で行われているイベントには訪れたことがあるか。
- ・清水邸と聞くと思い浮かべるのは、本宅か庭園か。

まず、横須賀で飲食店を営んでいる A 氏（女性、40 代）と B 氏（女性、40 代）に話を

聞いた。この二人は清水邸に行ったことはあるが、数年前のことであり最近とは全く訪れないという。また、清水邸で行われていたホテルの鑑賞会に訪れたことはあるがそれも数年前の話で現在ではイベントの話も耳にしないそうだ。この二人は清水邸と聞くと湧き水がきれいな庭園の方を思い浮かべるそうだ。また、B氏は浅羽町から通っているそうで、近隣の町であるにも関わらず清水邸やそれに付随する情報はやはり耳に入っていないといていた。そのような話の中で、二人は地元の人には近すぎて清水邸に行くことが少ないのではないかと、灯台下暗しでは、ということも話していた。次は和菓子屋を営むC氏（男性、40代）である。C氏は4つの和菓子屋が交代で清水邸の中にある湧き水に和菓子を届けているというが、その際に裏口から入ることが多く、じっくりと鑑賞するために清水邸を訪れることはほぼ無いといていた。しかし、近年の遠州横須賀倶楽部と観光協会によるイベントなどの主催も含めた清水邸の管理おかげで、以前と比べて地域内での繋がりはより強固なものになったともいっていた。

このように清水邸は横須賀において歴史的、文化的にとっても価値があり、大きな存在である。にも関わらず、地元の人から見るといつも目にしており当たり前の存在であるためわざわざ訪れることが少ないということ、地元の人から見ても地元向けに利用されている清水邸の本宅にはあまり関心がなく、「清水邸といえば庭園」というような観光客などの外の人が見たときと同じような方程式が成り立っていることがわかった。これらのことは課題であり、これから横須賀をより良くするため、どのように変えていくのか考えることが不可欠である。

4 考察

ここまで、横須賀において清水邸がどのような機能を有しているのか、遠州横須賀倶楽部という民間団体と観光協会という公共団体がどのように清水邸を利用しているのか、地元の人の清水邸に対する意識はどのようなものかということを自らの調査をもとに記述してきた。

ここで、日本のほかの地域において歴史的建造物がどのようにまちづくりに活用されているのか、その比較対象として北海道の事例について触れたいと思う。白木里恵子によると、北海道は近世建築が少なく歴史的建造物が多いが、滅失した歴史的建造物も多い。そのような状況打破のため歴史的建造物の活用が多くなっている。しらおい創造空間「蔵」では、歴史的建造物である当該建造物を地元NPOが多目的ホール等に転用し、地域でのイベントを開催する場所などとして使用したり、浪花町十六番倉庫は地域の象徴であった建造物を地元NPOから賃貸し、地域のイベントの開催場所として使用したりすることがある（白木ほか 2008）。このように全国各地と比べ歴史的建造物の活用という点で、清水邸は同じような活用がなされていることがわかる。前述のように、横須賀にある団体の人びとにインタビューを続ける中で、清水邸庭園が観光地として外からたくさんの人に横須賀を

知ってもらいたいという目的のもと利用されていること、清水邸本宅が地元の人に地元をもっと知ってもらいもっと好きになってもらうために利用されていることがわかった。しかし、地元の人にインタビューをしてみると「清水邸といえば庭園」、「わざわざ清水邸に行くことはしない」といった声が多かった。つまり、地元向けに利用されている清水邸本宅よりも清水邸庭園の方に地元の人意識が向いているということである。外向けに利用されている清水邸庭園は利用している団体の目的とほぼ合致しているが、清水邸の本宅は地元向けに利用されているにも関わらず、地元の人への関心は薄くなっている。このように歴史的建造物の活用方法などは全国とほぼ変わらないものの、地域内に普及がなされていないのは、やはり少数の人が活用に大きく関わっていて、多くの町の人にはあまり根付いてないという理由からだろう。冒頭で述べたように、まちづくりにおいて必要なのは地域ぐるみの参加である。より大きな成果を求めるなら横須賀の住民全員が主体性と当事者意識を持ち、円滑なまちづくりをしていくことが必要になってくる。民間の団体が管理するというのは、より一般市民に近い目線で利用方法などを考えることができ、フレキシブルな方法であるが、それにはより多角的な見方をすることが肝要である。身内だけで活動が終わらないようにより一層濃い広報活動（もちろん地元の人に向けても）をすることが必要なのではないだろうか。

5 おわりに

今回、フィールドワークで横須賀に訪れ清水邸を調査したところ、清水邸を清水邸たらしめているのは他にもない横須賀の人びとであることがわかった。また、清水邸だけではなく三熊野神社大祭なども相まって地元の繋がりをより一層強固にしておき、絆がとても強い町であることもわかった。このように横須賀の人びとたちは横須賀という土地、人びととの繋がりを大事にしているということが、とても良いものだと感じた。事実、私が調査で町を散策している時も、たくさんの人が挨拶してくれたり、突然の訪問にも関わらずインタビューを受けてくれたり、とてもあたたかい町だった。そのようなあたたかさが横須賀のいいところだと感じた。

参考文献

桑原武

2015 「遠州横須賀藩と清水家 暫定版」遠州横須賀倶楽部。

白木里恵子・久保勝裕・大垣直明

2008 『歴史的建造物の転用とまちづくりへの波及に関する研究-北海道における 10 事例を対象として-』『日本建築学会計画系論文集』73: 601-609。

福井英雄・高田昇

1993 『地域づくりと住民自治』 法律文化社。